

えでぴあ

6

立川と語ろう 立川に生きよう

June 2011

Écoutez Bien Vol.29 No.319

表紙の人／小林蒼樹園のみなさん(西砂町)



山に魅せられて

立川女子高校山岳部

高橋流 初心者のための登山教室

11

指導：高橋清輝

アシスタント：内山道子

山岳写真：桃井尚志、富島和子 協力：立川女子高校山岳部、同OG会

2人の新入部員をモデルに初心者のための登山教室を掲載してきたが、今号と最終回の次号では、高橋先生の登山指導についての考え方を、目的と教育理念をテーマに述べてもらう。まったくの初心者女子高生を登山家にしてしまう高橋先生。どんな教育がそこにあるのだろうか。

【プロローグ】

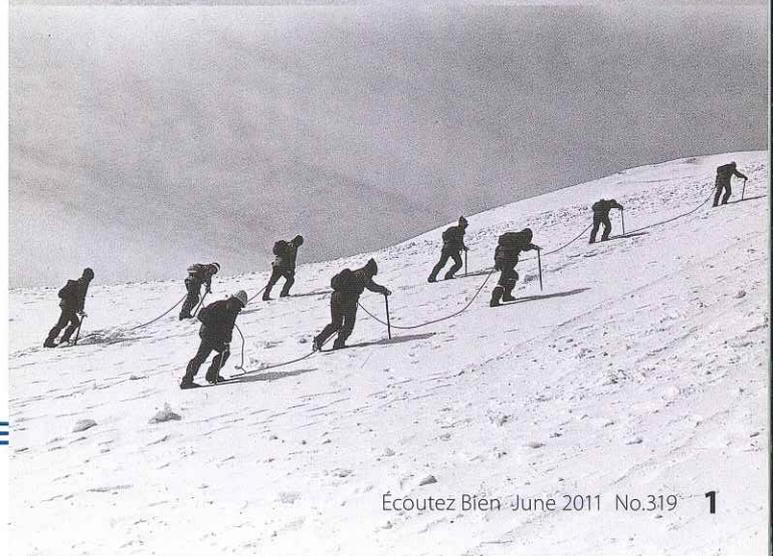
平成7年、私を登山隊長とし、卒業生、現役部員によって編成された立川女子高校山岳部遠征登山隊は、中国パミール高原に位置する未踏峰・コングールIV峰(6650m)に挑戦し、世界で初の登頂に成功した。過去イギリス、イタリア隊が挑み失敗した難峰に、しかも11名が山頂に立つ快挙。中国の高峰で女性が初登頂となったのは17年振り。しかも主役が女子高校生であり、中国登山協会が“立川峰”と命名することを政府に申請する程の高い評価を受けた。また東京都から『“より高く、より困難への挑戦”をクラブ目標に、優れた指導者の下で継続的に厳しい訓練を重ね、育まれた個々の可能性を結集し、互いに支え合うチームワークを養成…(略)…大自然を舞台に、自らの持つ力の全てを賭けて未知なる世界の困難に挑戦し、目標を達成してゆく姿は、若者のみならず、人々に勇気と自信を与え、都民が広く賞賛するところである』との選考理由で、高校生初の都民文化栄誉賞を受賞した。

奉職後、集まってきた生徒達を前に「力を合わせて困難に挑み、それを乗り越えた時の感動を味わって下さい。危険を除くことは指導者である私の仕事。一丸となって極限状況へのチャレンジをテーマに、女子高校生として成しうる可能性を伸ばしましょう。青春に悔いなしとなるように、意気軒昂に私について来て欲しい」——私の第一声だった。

昨今、自らは苦勞を避け、選手と同一化してフラストレーションを晴らすサポーターの存在がもてはやされ過ぎの感がある。自らが主人公となり、汗水流し努力して困難の壁を克服して得た心からの感動の喜びが、いかに尊く、誇れるものであるかを体得して欲しいと願う。

【魅力ある目標設定を】

まずゴールに魅力を感じる目標を設定し、スタートラインにつかせること。「君達だって頑張ればヒマラヤ登山も実現可能だ」「是非行きたい。そのための苦勞なら何でもするから連れていって下さい」——この会話が現代っ子においても極限状況に挑む第一歩。早速翌日から、部員は一般の生徒より1時間早く登校し、石のブロックや煉瓦を積み20Kgの重さにしたザックを背負い、5階までの階段を何十回も往復する「ポッカ」と称する訓練を始めた。(次号に続く)



過去に学んで 今を生き、未来を拓く

国文学研究資料館 研究部

助教 加藤聖文 さん

国文研には歴史の先生もいると聞いた。
証券マンから転身。未来のために今を残し続けている。

先生のご専門は近現代史だとうかがっていますが。

加藤 僕は日本近現代史の専門で、この資料館では近現代の資料を扱っています。僕が今関心を持っているのは、戦中から戦後にかけての資料です。古文書などはお宝のようになくなってきていて、捨てる人はあまりいない。しかし戦後の記録は、軽視されがちです。これから五十年、百年先には立派な歴史資料になるものです。これを保存しておかないと僕らの後の世代になった時に、あの時代を検証できなくなってしまう。素材を残しておけば、後々なにかの研究に使ってもらえるのではないのでしょうか。ごく普通の一般庶民が記し残したもの——日記、学校時代のアルバム、卒業証書。誰もが持っているのに、その価値は個人的なものだと捨てられてしまうことが多い。後の時代から見るとその時代を知る手がかりになる大切な素材なんです。名も無き人々の記録は、今意識して残さなければ無くなってしまいます。

から持ち帰ったものとか、帰国してから書き残したものとかに興味があります。戦後六十五年も経って殆ど風化しかかっている記憶ですが、人間はある種強烈な体験をした時には、何か記録を残しておきたいと思うようです。今の時代になり、代替わりして遺品を整理していたらこんなものが出てきた。捨てるのも惜しいし、どうしたらいいだろうというケースが最近多いんです。僕はこうした資料を集めている適切な所を紹介したり、またはここで保管したり、その目録を作ったりやっつけて公開するかを考えたりしています。

先生がお話するといっぱい集まってきましたね。

加藤 講演会などで話すときどんどん話がきますが、これは社会的使命として応えなければならぬことだと思っています。その際、資料の価値判断はこちらでは絶対にしない。価値判断はお宝の値段をつけるのと同じ。我々は鑑定士ではないので、平等に誰の作った資料でも整理して保管していきます。記録としての価値はすべて同じなので。ただ資料の形態が様々で、技術的にその分類が大変ですね。ノートや写真、着ていた服だと帽子、同窓会誌。でも全部受け入れて等しく整理して公開するの

で、本当はお国なまりがあるはずなんです。けれど実際には標準語でしゃべっていた。引き揚げてきて、それぞれは本籍地である田舎に帰りますよね。満州で生まれ育った子供なんかは、地元のことばは方言がわからない。自分は標準語をしゃべる。引き揚げ者の共通する点は、だいたい言葉が原因でいじめられるということ。生死を彷徨う引き揚げ体験をして、ようやく日本に帰ってきて最初の関門が「言葉」なんです。でもそういうことは、こちらがインタビューして掘り起こしていかないとわからないことです。

引き揚げて来られた方も、自分個人の体験としか思っていないんですね。

加藤 そうなんです。個人的体験が歴史的に価値あるものかどうかわからない。こちらでお話を集めていくと、ある種共通のものがわかってくる。あの時代の雰囲気というのが見えてくるんです。こういうことは意識的に残していこうとしないと残らないですよ。

先生のお仕事は、過去を残しているようで未来を見ているんですね。

加藤 そうですね。歴史資料というのは未来にどうつながって行くかを考えないといけない。未来の人たちがどう活用していくか。再活用されることで記録は生きてきます。

先月号で登場頂いた京都の酢屋さんですが、「酢屋は過去を歴史にしまわな」とおっしゃったんです。

加藤 うん。歴史ってそういう意味では罪深いところが

が原則です。

加藤 満州に行っていた人が、一概に同じ社会層で生活していた人はいれば、昭和の恐慌になってから行った人もいる。それぞれの時代背景も違っているし、第二世代、第三世代になっていた人もいます。会社員なのか役人であったのか、満州の奥地で開拓団やっていたのか。生活水準もちがう。満鉄の社宅なんてとてもぜいたくで、日本よりも豊かな生活をしていった人たちがいました。

そういう近い過去は、みんなわかっていることではなかったんですか？

加藤 実は生活レベルっていうのは当たり前過ぎて記録に残らない。今もそうですよね。電車の乗り方なんて文書にして残さなくなっちゃってみんなわかってるわけです。スイカかバスモをチャージして乗るなんて当たり前です。僕の小さい頃は硬いキップでパチンとはさみをいれていた。現代の子供は知らないけど、当時は当たり前だったから記録として残していない。

満州には日本の様々な地方から人が集まっていますの

あって、資料館などを作った段階でも一旦終わってしまう。その事実を伝えたいと思っても、作った段階で終わっている。歴史家としてはそこがある種非常に難しい。いかにして今の時代の人に共鳴してもらうか、生かしていくか。

酢屋さんは、時代に合わせて変わりがら、変えてはならないところは変えない、と。でもすごくむずかしいです……。

加藤 むずかしいです。どこか線を外れてはいけない所があって、かいつて時代のニーズに添えていかなければならない。あんまり応え過ぎてしまうと迎合になってしまう。

最近マンガにもゲームにも歴史がテーマになっていた。時には歴史がわからなくなるようなことも(笑)。
加藤 こわいですよ(笑)。戦国武将もキャラクター化されて。それもいいんですけど、やりすぎてしまうと本当に歴史を見る目というのが……。

でもそれで歴史が増えただけですよ(笑)。

加藤 そうですが(笑)。博物館にお客さんが入るとい効果はあったかもしれない。誰かが好きという歴史入門もいいのですが、あくまでそれはフィクションであって。やりすぎるとその当時の歴史を知ったことにはならないんです。

歴史を知ることの重要性とは？

加藤 歴史は人間がやっていることですから、人間の本質というのに関わってきます。今の時代で自分がどう生きるかという時に、ひとつの参考というか手引きになると思います。そのために歴史はある。過去の人とうやうやって同じ目線で対話できるか。過去の価値観とか雰囲気とかをできるだけ理解していないとその人の目線にはなれない。現代の目線、今の価値観で見ると豊臣秀吉だって徳川家康だって、どこまでいったって平行線ですよ。彼らが生きた時代の目線でみて、あの時代は一体何だったのか、あの時代の中で彼はどのようにしてこういう判断をしたのか、なぜこんな生き方をしたのかと考えていけば、それなりの人間の苦悩やある種人間の弱さが見えてくる。人間は完璧ではない、ある種宙ぶらりんな



存在だということを前提に考えると、今自分が生きている中で、非常にいい参考になっていくと思うんです。

個々の人間だけでなく、国もそうですよね。

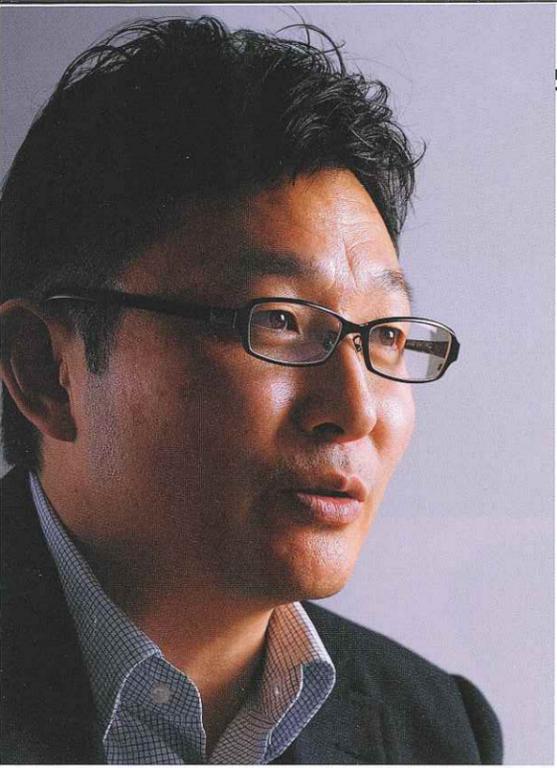
加藤 国と国との関係も、人間と人間の関係と本質的には同じ。思い違があると感情的なすれ違いがあるとか、非常にばかばかしい部分でわかりあえず、結果的にものすごく関係が悪くなって最後に戦争になる。望まなくても戦争は起こってしまうし、そういうケースの方が圧倒的に多いんです。

僕が歴史家になったきっかけはソビエトの崩壊です。あんな超大国があつたことがなく、しかも戦争もなく崩れてしまった。人間がやっているのに、結果的に人知を越えた予測不可能な方向に向いて、最後はあつというまに潰れてしまった。国家とはいかにもろいか、人間の力にはいかに限界があるかということを思い知ったわけです。今回の原発なんかもそうですが、全部が維持できるとか、すべてを支配できるという事態がそもそも間違いであつて、何かのきっかけで誤った対策を続けていくとあつというまに崩れてしまう。ソビエトは僕にとつて衝撃でした。

歴史を知らない未来は見えないとよく言われますよね。

加藤 ええ。戦争なども、どこが侵略したとかいうことよりも、単純には言い切れない、曖昧な部分が非常に重要なんじゃないかと思えます。正しいと思つて対応していたけれど、実は全然正しくなかった。でもやっている人に悪意はない。結局人間は未来が見えないので、どの道を進めばいいかという選択なんですね。いいと思つて選んだ道を進んだら谷底に落ちちゃった。そんなことの繰り返しじゃないかな。そうなる前に過去の事例に学んでいかないと未来が見えてこないです。

今の日本が迷走していると言われるのは、戦後のある時期で過去について冷たくなったからのような気がしますが。それはもう終わったことでしょうか。今が大事、と。価値観がお金になって、経済的効果、効率化、合理化が優先され、過去を軽視した結果が今に繋がっているのではないのでしょうか。



立川の春 ふるさとの春

それでも季節はめぐり、花は咲く

桜前線という言葉が日本から消えた日。
一ヶ月後、東北の地にも桜が咲いた。

桜と菜の花が春爛漫を告げる残堀川の光景は
いつもの年と同じよう。

また来年も同じ桜が観られるように、
また来年もあの人と一緒に桜が観られるように。
大きな自然の前に、人間の小さな願い。

人間も自然の中の一部なら
それでも季節はめぐり、必ずまた花が咲く。

今月は、豆料理の定番
「煮豆」から2種をご紹介します。

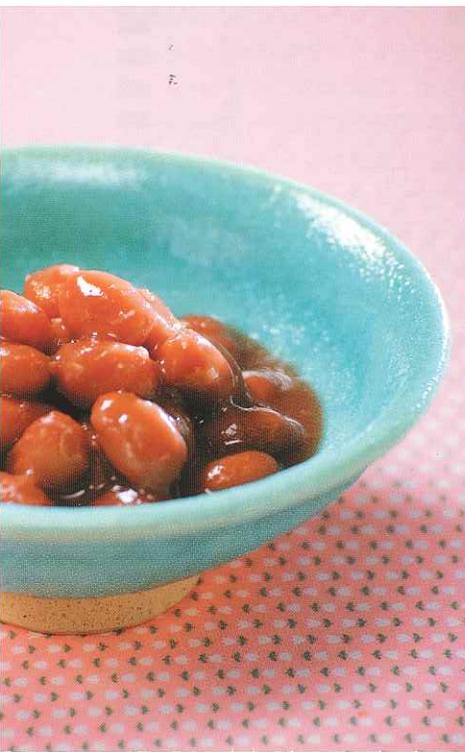
【金時豆の甘煮】

材料（4人分）

金時豆 300g 砂糖 280g

作り方

- ① 豆は洗って3～4倍の水に一晩つけてもどしておく。
- ② つけ汁ごと5分ほど煮てから汁を捨て、豆より2～3cm 上まで水を加えて中火にかける。
- ③ 蓋をして弱火で20分～30分、豆が煮汁から出ないように差し水を加えながら煮る。
- ④ 指でつまんで軽く押さえて、芯がなくつぶれるくらい柔らかくなったら煮汁を半量ほどに減らし砂糖を加えて5分ほど煮る。
- ⑤ 火を止め、そのまま放置し味を含ませる。

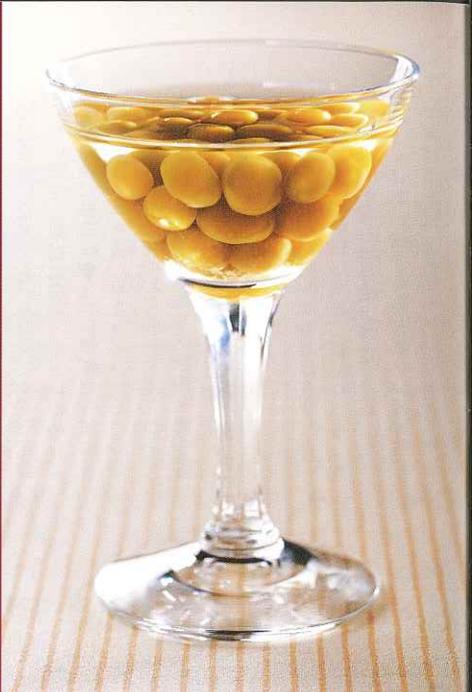


たまに手作り、大きく満足

②

おうちでおいしい
五豆ものがたり

調理指導…三上康子



【青えんどう豆の ひすい 翡翠煮】

材料（4人分）

青えんどう豆 300g 砂糖 280g

作り方

- ① 豆は洗って3～4倍の水に一晩つけてもどしておく。
- ② しわがのびてふくらんだ豆をつけ汁ごと落とし蓋をして火にかける。
- ③ 3時間ほど豆が煮汁から出ないように差し水を加えながら弱火で、やわらかく煮る。
- ④ 別の鍋に分量の砂糖を入れ③の煮汁をひたひたまで注ぎ砂糖を溶かしたら、煮汁をきった豆を全部入れる。
(蜜は甘いくらいがよい)
- ⑤ 落とし蓋をして弱火で5分ほど煮る。
(この時、蜜から豆が顔を出さないようにする。足りないようなら水、砂糖を加える)
- ⑥ 火を止め蓋をして放置して、ゆっくり味を含ませる。